

「特集 建設分野の魅力」 第7回

ダムや排水機(ポンプ)場は、日常生活で身近に感じる機会はないが、私たちの暮らしを支える土木施設。大雨や高潮時にダムの放流量を調節し、水門やポンプを動かして地域住民の生命や財産を守っている。災害を未然に防ぐのが当然の役割であるため、表舞台に登場することは少なく「縁の下の力持ち」

といえる存在だが、台風や集中豪雨が多発する中で担う責任は年々大きくなっている。6月からの梅雨や台風時期に向けて準備する県の「青野ダム(三田市)」と「宮排水機場(姫路市)」を訪ねて、現場の第一線で活躍する施設の操作責任者に話を聞いた。(取材協力)兵庫県建設業育成魅力アップ協議会



命を守る水の番人

水系の水害を防ぐ対策は増加傾向。大雨が予想される際に洪水警戒を行うことを目的に、88年完成。さらに2001年には生態系回復のための多自然型魚道が整備されるなど、治水・利水機能に加え、環境保全や親水性にも配慮されている。

治水が目的のダムは通常、下流河川の環境保全のために一定の水量を流しているが、大雨が降ると下流河川への放流量を調節することで川の氾濫を防ぐ仕組み。青野ダムでは洪水調節のために、細かなゲート開閉操作を必要とするのが特徴だ。このダムの操作や点検に約20年間携わっているのが、宝塚土木事務所青野ダム管理所の今村浩造さん(52)。大雨が降る時は気を抜く操作室で、リアルタイムの雨量や水位などの観測データを監視しながらゲートを遠方操作している。洪水調節や整備、情報収集を行う回数は平均2年に1回ほどだが、近年は重要になる。「この仕事がスムーズに行えるように」

青野ダム(三田市) 治水、利水から環境保全まで

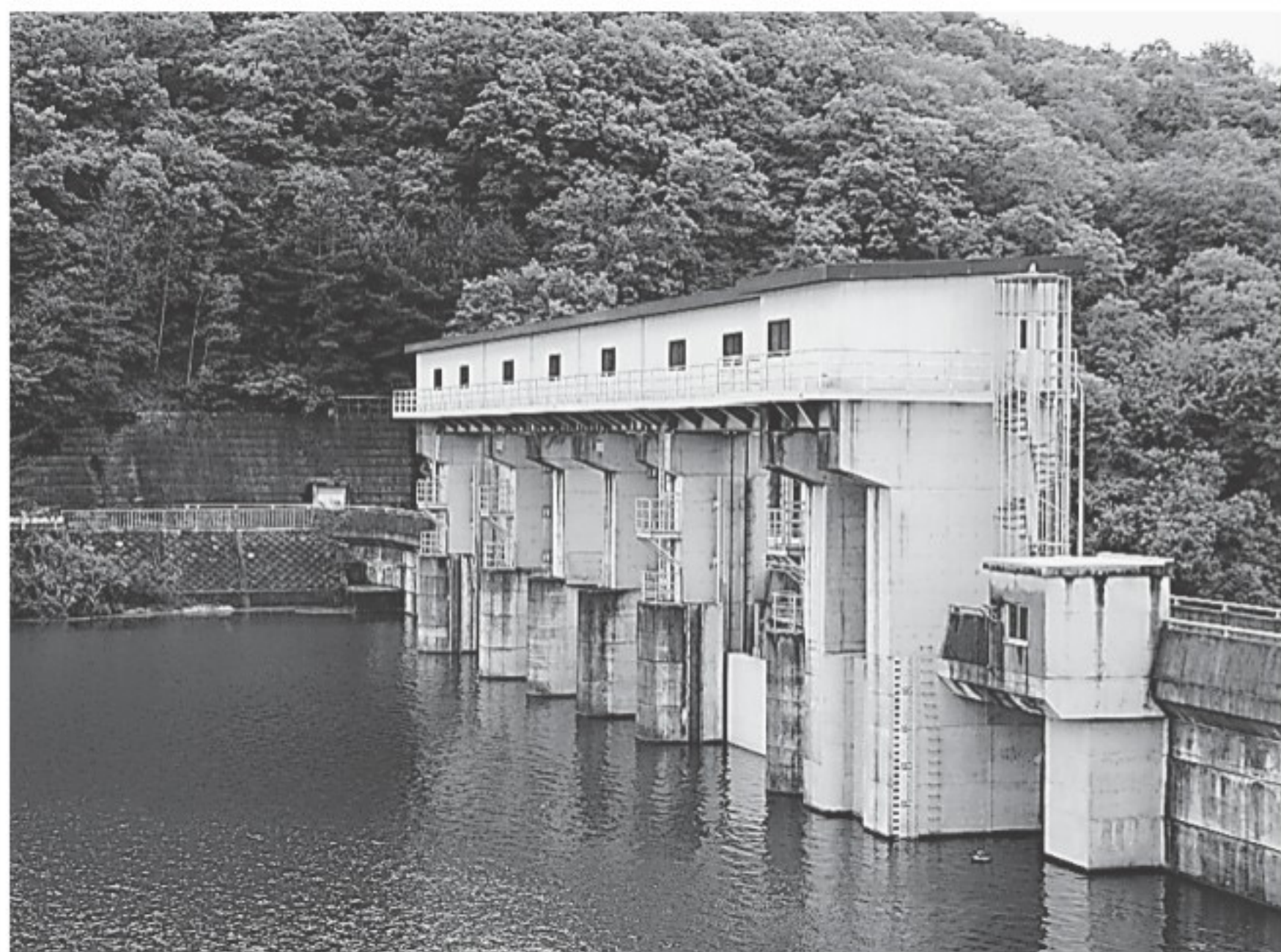
水害防ぎ町の発展に寄与

三田市中心部から北へ車で約20分。青野川と黒川の合流部に青野ダムはある。1961年6月の梅雨前線や65年の台風23、24号により、過去に家屋の流出や浸水被害を受けてきた武庫川沿いの地域は、一方で80年代からのニュータウン開発で都市用水の需要が急増。この二つの課題点を解決するために青野ダムが計画された。

宝塚土木事務所青野ダム管理所 今村 浩造さん



日ごろの点検・整備が重要



湛水(たんすい)面積県内1位の青野ダム



ダムで分断された生態系を回復するため、全国に先駆けて整備した多自然型魚道。魚道を通る生き物が観察できる「自然の水族館」



ダム堤体内には内視鏡検査のように検査できる監査廊があり、漏水量をチェックする

県宝塚土木事務所の松浦元治課長は「ダムは近年、マイナスイメージをもたれがちだが、青野ダム完成後の2004年の台風23号時には、ダムの洪水調節により、武庫川の水位を約60センチ下げられたと推算されている。過去の洪水被害を知る世代が減る中、ニュータウンなどに移り住んできた若い世代に、ダムの必要性やダムの事業効果について知ってもらう努力をしていきたい」と話している。

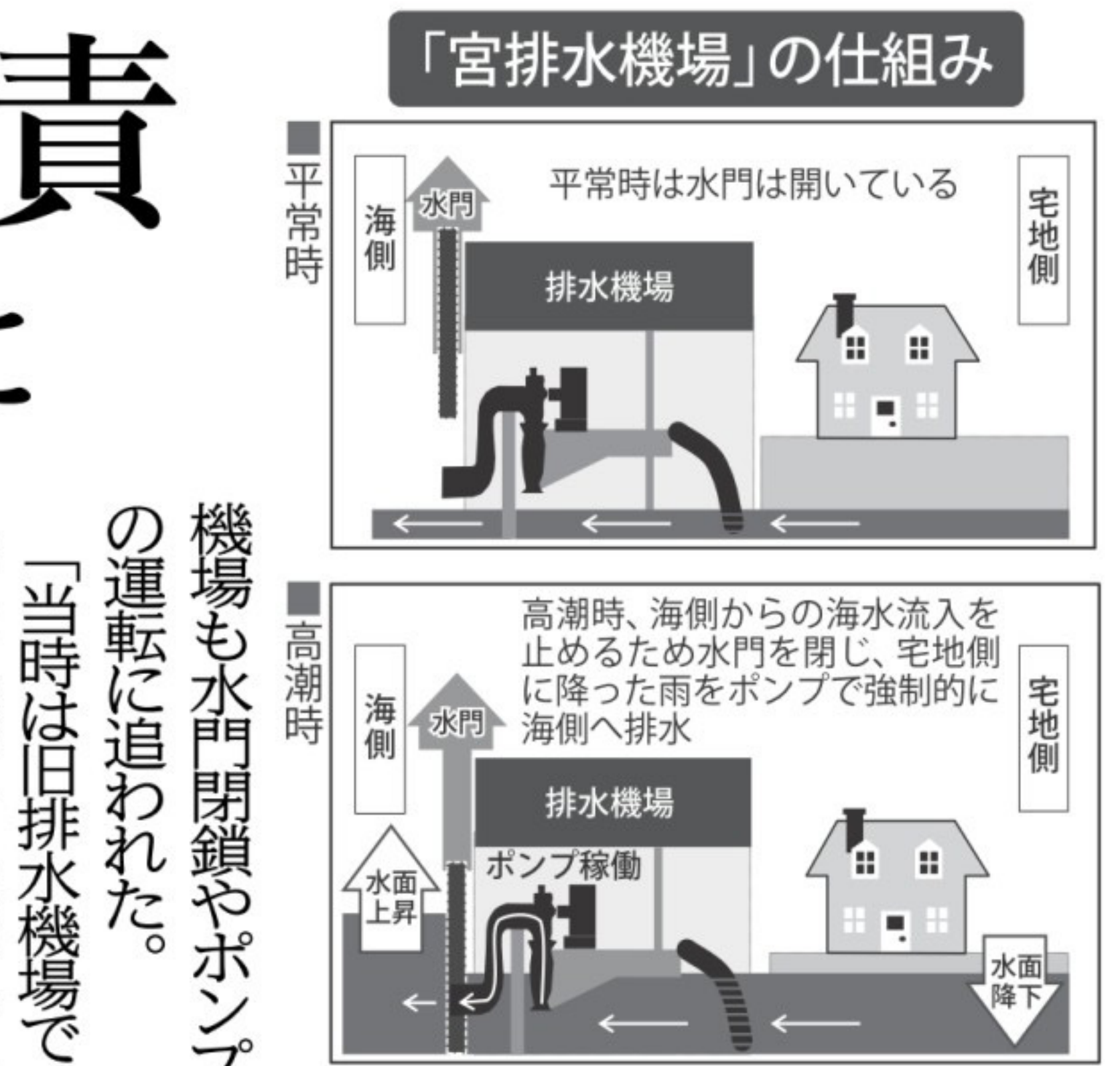
宮排水機場(姫路市)

宅地の高潮被害防ぐ



自家発電機や排水ポンプに異常がないかを点検。排水機場の停電時でも稼働できるように、自家発電機を設置している。いずれも姫路市飾磨区宮

姫路港にある呉姫路港管理事務所の宮排水機場は、宅地の地盤が低いことが原因で過去に高潮被害を受けてきた飾磨地域を守る目的で、1975年に完成。2014年には、ガスタービン式の原動機を採用し、水門の開閉を遠隔操作できる運転システムを備えた2代目の排水機場が新たに完成した。



失敗が許されない重責 住民からの感謝の声が喜びに

「失敗、やり直しが許されず、緊張感を強いられる仕事ではあるが『ある台風の夜』徹夜ですと勤務してくれてありがとう。お疲れさまでした」と近隣住民からねぎらいの声をかけてもらった時が一番やりがいを感じた」と藤原さん。「一年中気は抜けないが、特に潮位が高くなる春先は気を引き締めて準備に当たっている。今後も住民に安全、安心な生活を送ってもらえるように、万全の態勢で臨みたい」と話している。

宮排水機場・操作責任者

藤原 征夫さん



「旧施設の時水門上で操作しないと行かなかったが、新施設は操作室から遠隔操作できるようになった」と藤原さん